

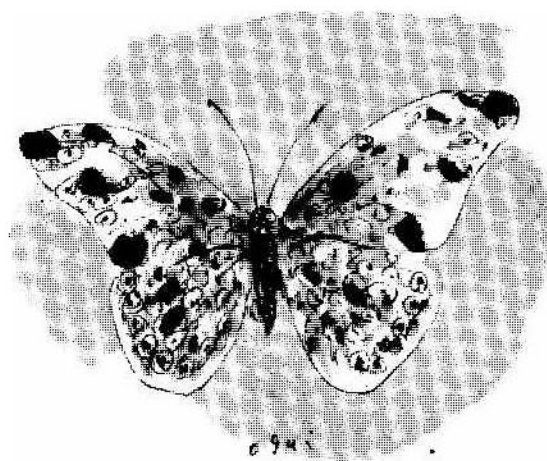
# 愛は風雪に耐えて

愛と真実の記録——④

滝沢 修・文子著

愛と真実の記録——④

# 愛は風雪に耐えて



東都書房

愛は風雪に耐えて

昭和三九年一月二五日 第一刷発行

●著者——滝沢 修・滝沢文子

●発行者——斎藤修一郎

●発行所——東都書房

東京都文京区音羽町三丁目一九番地

電話——東京へ九四二〇一一二（大代表）

振替——東京 七二七三二

●印刷所——豊国印刷株式会社

●製本所——株式会社若林製本工場

●定価——二六〇円

落丁本乱丁本はおとりかえいたします。

## 目次

愛は風雪に耐えて（滝沢文子）……………三

愛の往復書簡……………七

編者のことば（古谷綱武）……………二四五

装幀・荻 太郎  
構成・森下年昭



ある晴れた日の団らん 昭和25年8月 豊島園にて

滝沢 修（本名脩）

明治三十九年十一月十三日東京に生る。開成中学卒業。築地小劇場、左翼劇団を経て現在民芸に属し、演出、映画、放送に活躍中。著書に「俳優の創造」がある。

滝沢文子

明治四十三年十一月十三日に生る。東洋英和女学校卒業。文芸同人誌「火の鳥」劇団「テアトル・コメディ」などに属したこともある。昭和七年四月結婚。昭和二十七年五月永眠。



## 風雪に耐えて

——私たちの結婚——

滝沢 文子

わたくしが二十二、滝沢が二十六、おもえば若い夫婦であつた。

わたくしたちが結婚した時期は事変のはじまりの頃であつた。あれからもうやがて二十年にかい年月がすぎる。終戦までのわたくしたちの結婚生活のどのひとこまをおもいだしてみても、いつもなにかしらつらいことか、不安なことか、くるしいことのつきまとわな<sup>ついで</sup>い追憶というものはない。いま、ながくなかく待ちのぞんだ戦争のない国に住み、経済的にも前よりは安定のある生活をしているわたくしにとって、すぎてきた起伏の多い歲月のおもいではむしろたのしく、甘い。あらゆる苦難やよろこびを良人である滝沢と共にわかちあい、たすけあつて生きぬいてきたというささやかな誇りがわたくしの胸をあたためる。

そのころ滝沢は左翼劇場の俳優で、朝から晩まで劇団の仕事に追われている忙しいからだで

あったが、収入というものはほとんどなかった。わたくしもいわゆる「お嬢さま」そだちで、ごはんをたくことも、雑巾がけをしたこともないという心ぼそい女であった。滝沢と結婚しようとおもいきめてから、速成に習いはじめた英文タイプライターの卒業証書を、結婚後やっと手に入れた、英文タイピストとして職についたのは結婚後一ヵ月日であった。人に使われた経験のないわたくしにとって、働くということはたのしさよりもっと多くのつらさを感じさせた。「お金を得る」ということのたいへんさをわたくしはそのときはじめて知った。もとよりわたくしのとって来る月給などはしれたものなので、物置小屋のようなアパート代すらとどこおりがちで、わたくしたちはそのころ五銭の風呂代にもこと欠く始末であった。わたくしは滝沢の思想と仕事を充分理解していたから、そのような生活のなかでもすこしの不平も不満もなかった。

やがて日華事変がおこり、「不拡大方針」という新聞の大きな活字に熱い祈りをささぐめていたけれど――。やがて新劇団にも弾圧だんあつがくだって、新協劇団しんきょうげきだんの有力なメンバーの人たちと共に滝沢も検挙けんきよされ、起訴きそされた。もうその頃はわたくしたちは二人の子供たちの親になっていた。このことは、幼い子供たちの理解を越えることがらなので、「お父ちゃんは御用で長い間御旅行よ」といい含めて、るすばんに通ってきてくれた年老いた母に子供たちを託して、わたくしは毎日心

づくしのおべんとうを留置所にいる滝沢のところにはこんだ。うちつづくながい貧乏ぐらしのあげくに、一家の働き手である滝沢をうばわれて、わたくしはまったく途方にくれた。数すくない衣類を質屋にはこんだり、書籍をうりはらったりしたのはそのときだった。親切な兄弟や友人たちの援助で、二年にちかい滝沢のるすのあいだをどうやらしのいだ。はじめて頭の中でだけ理解する理論としてでなしに、滝沢の考えかたの正しさを知ることができた。あみ笠、手錠姿の滝沢を見たときは、わたくしはつよい義憤<sup>ぎふん</sup>と、自分たちの無力さをかんじて涙がながれた。看守の立ち会いのもとでの三分間の面会や、裁判所の検閲をうける手紙のやりとり。わたくしたちは鉄窓にへだてられながら、その時期におたがいの理解と愛情をよりふかめることができた。くるしかったあのころが奇妙になつかしくて、わたくしたちの獄中通信をときどきよみかえしてみたくなることがある。

太平洋戦争になって間もなく滝沢は保釈<sup>ほしやく</sup>になってかえってきた。世の中は挙げて戦争熱にうかされていたあのころ、わたくしたちはそうした空気にもとよりなずむことができなかったので、なんだか仲間はずれになったようなころもちだった。出獄以来仕事をする自由を奪われていた滝沢は、生活のために筆耕をしたこともある。わたくしたちはさわがしい社会の片隅で、ひっそ



りと親子で身をよせあっていた。晴れた日には滝沢は子供たちやわたくし相手に畑仕事に精をだし、雨の日には原稿かきに日をおくった。わたくしたちは闇物資など買う余裕はなかったから、いつも空腹だった。一ぱいのうすいおかゆを、おたがいにくずり合った日もあった。滝沢に召集令のくることをなによりもおそれながら、そのころ生れた末の娘を背負って、幼い子供たちの手を引きながら、夜、昼の区別なく防空壕に出たり入ったりしてあけくれた日もある。

終戦になってようやく、滝沢の執行猶予中という、いつも頭におもくのしかかっていた雲も晴れ、滝沢のしたい芝居もぼつぼつできるようになった。

すぎてきたわたくしたちの二十年にちかい結婚生活を、「風雪に耐<sup>た</sup>える」といっては大げさかもしれないけれど、なんの苦勞も知らずに娘時代までをすごしてきたわたくしにとっては、まさに嵐のなかを生きぬいてきたおもいなのである。けれどそのどの瞬間にも、わたくしは自分のえらんだ結婚を悔いたことはない。この道にだけがわたくしのしあわせの花が咲いていると信じている。

昭和二十四年

# 愛の往復書簡

文子より修へ——からだに氣をつけて——

とうとういつてしまいましたね。最後に十分ちがいぐらいで会うことができず、会ってもしかたがなかったと思いかえしても残念でたまりません。あの日、今日こそおいしいパンをもってゆこうと思ってパンの買い出しの行列に加わってたために、交番から知らせにきたときは留守でした。あとから聞いて、莊一と直子をママがまだ来ないのでおとなりに頼んで自動車でとんでゆきました。十分位前に行ってしまったとSさんに聞いてがっかりしました。もう涙なんて出すまいと思ひながらも涙が出てきて、ろくにみなさんにも挨拶もせず来てしまいました。気がついたら貯金帳をなくしてしまいましたので交番に届けたりしました。今日淀橋署にあるから取りに來いと通知が來たので、それをとりにゆきがてらお菓子を一円程買って特高室によりました。おべん当やおそばの払いもSさんに言われましたので払って來ました。翌日すぐフトン、着物差し入れにゆこうと手筈をしてましたが、Kさんの奥さんが本人が行ってから三日目でないと差し入れは受けつけてくれないそうですので、明日で三日目になりますから明日持ってゆきます。

あなたが待っているであろうと思い、その事情知らせることが出来ず氣をもらっています。まあ、もうなるべくイライラせずにいようと考え直しました。とにかくこれでゆき着く所にゆき着いたのですから、あとは身体さえ丈夫にして待っていれば必ず帰って来るのだからと自分で慰めています。一日一日が帰って来る日に近づいているわけですからね。なにとぞ、あなたも身体に氣をつけて、氣をのんびりとさして下さい。いろいろ辛いこともあるでしょうけれど、あなたのことだから大丈夫耐え通して元氣に帰って来てくれると信じています。

莊一も直子も元氣です。二人ともほとんど外であそんでいます。莊一が時々お父ちゃんお父ちゃんといっています。いま御用だからと言ひ聞かせています。家の方のことはとにかくどうにでもあなたが帰っていらつしやるまで、二人を健康に育てていますから心配しないで下さい。あなたが帰って来る頃は直子もきつと口がきけるようになっていくでしょう。

面会にも十日程しましたらゆきます。差し入れのこと本のこと氣がついたら話す用意をしておいて下さい。涙なんか出しているとすぐ幕ですから、よく話すこと考えて行ってどんどん話さないと駄目ですよと注意されました。いろいろのことすべて最善をつくしておきますから、あなたは安心して下さい。くれぐれも身体に氣をつけて下さい。病氣をせずにあなただけが元氣でやって

いてくれさえすれば私も安心しておかえりを待っています。

少し気がおちつきましたらまた写真でもうつしましょう。『皇国大日本史』買いましたから、フトン類を入れる時一緒に入れておきます。それと『故事成語辞典』もありましたから、この二冊を最初に差し入れます。そのうちに本を読む速度もわかって差し入れも上手になりましたようから、始め暫くは少々不自由したら我慢して下さい。大菩薩峠<sup>だいぼさつとうげ</sup>も近日中に揃えて一冊ずつ入れてゆくつもりです。なにとぞなにとぞ身体に気をつけて無事に元気で帰って来て下さい。では今日はこれでよします。『言葉の泉』という辞典が二冊揃いで古本屋にありますかほしいですか？『言海』はまだ手に入りません。

文子より修へ——手紙かくなぐさめ——

いまの私にとってはあなたに手紙を書くことだけが残された一つの慰めです。出来ることなら私もこの手紙と一緒にあなたのところにゆきたい。そしてお互いに慰め励まし合ってこの苦しい道を歩く力をほしいと思います。こんなふうに会うことも話すことも出来なくなってしまう

っては、どんな力も勇氣も消えてなくなりそうです。こんなこと書いて、少しでもあなたに情ない思いをさせたり心配させたりしたらごめんなさい。でも本当は、春が過ぎて夏、それから秋、そして冬、そんなに長い間待ちつづけなければならぬのかと思うと、身体中の力がスーッと音を立てて出てゆくような感じがするのです。あなたはどんなふうにやっているかしら？　大丈夫やっけてゆけそうでしょうか。何よりあなたがどんなふうに感じているか、耐えてゆけそうか、そればかり気になります。辛い、淋しい、と言ってもそれは私のわがままで、ほんとに辛い淋しいのもあなたであることがよく解っています。なにとぞなにとぞお願いですから元気で、勇氣をもつて耐えしのんで下さい。またいつかのようにあなたが病気にでもなったらどうしよう、あんなことがあってもこんどはもう私が飛んでいって看護することもできないと思うと不安でなりません。なにとぞ病気をしないようにくれぐれも気をつけて下さい。これから梅雨時になり、夏になるとまた胃腸が弱るから悪い伝染病などにならぬようによくよく注意して下さい。身体も精神も元気でいて下さい。健康でいさえすれば、必ずまた親子四人揃ってたのしく暮せる日が来るのですから、私と莊一と直子のために、ぜひぜひ元気でいて下さい。おねがい!!

今日昼食に莊一がほしいというトビ魚を買ってやりましたらおいしいおいしいといっけてとても



喜んで食べていましたが、フト食べやめて、「オ母チャン、コンドオ父チャンニコノオサカナオベントーニモッテッテアゲテヨ。オイシイカラ」と言いましたので思わずホロリとしてしまいました。莊一はしきりにまだお父ちゃん待っています。お父ちゃんは御用でもうしばらく帰っていらっしやれないからと言いきかせました。しかし何かのたびにお父ちゃんお父ちゃんとなつかしがっています。いつかハガキの出せるときに一度カタカナで莊一に便りをやって下さい。きっと安心するでしょう。やっぱり何か感じるらしく、お父ちゃんのことを暗に心配している様子です。直子もすっかり一人前になり、一人で玄関に降り、戸も自分で開けてまたガラス戸をちゃんと閉めて時々出て行き、三十分から時には一時間近くも一人でブラブラあそんで来ます。昔の莊一と同じで家に帰って来ても黙って部屋に入って来、私が二階にいと一人で二階まで登って来ますが靴ははいたままです。暖かくなって手も足もニコニコ出している可愛らしい姿をあなたに見せられず、とてもとても残念です。この二人が仲よくしている様子などを見るたびに、親子四人揃って同じ屋根の下に暮しているということは何にもかえがたいしあわせであることをハッキリ感じました。この事件がすんだらもうこんどこそ離れないで暮しましょう。私たち親子四人が揃って暮せるなら、もうその他のことは富も名誉も要らないというのが私の真実の

心です。元気であなたも耐え通してくれ、私も二児を守って暮していれば必ずそういう日が来るのだらうと思うと、でも嬉しくなります。死んでしまったのではないのだから、まだまだいくらかも望みが実現出来るのですものね。

ふとん、衣類、お金などの差し入れお手もとにいったことと思います。それから植木も。あの日お菓子も果実も入れるつもりでしたら、十一時が五分すぎていましたので、十一時までしか受け付けてくれないので植木だけしか入りませんでした。こんどからもっと早く行って他の物も入れます。さ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>のシャツは夏でなくてはいけないといって入らず、折角ママが徹夜して縫って下さった長じゅばんも駄目でした。で二、三日中にさ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>の肌じゅばんと違う形のシャツを入れてみます。もしそれも入りませんでしたら、仕方ないから下にあのねまきの浴衣でも重ねて着て下さい。帯も駄目でした。枕も。他は大体予定した通りに入りました。もしまだほしいものあったら言っして下さい。いまのうちはどうも様子がわかりませんから、なんでもいちおう持って行ってみましょう。駄目なら駄目で仕方ないから。私が差し入れに入った日Aさんの奥さんにも会いました。足袋も一足しか入りませんでした。こんど宅下げの要領と面会の要領がわかればいちおうみんなすみますね。面会には四、五日中にゆくつもりです。許可さえ得られれば。

ああ、それから雑誌でも『富士』『現代』『キング』なんていいらしいですよ。他の人が入れてましたよ。写真の雑誌ももって行って一度聞いてみましょうか。この次に差し入れにゆく時、（面会に行く日にじゅばん、シャツを入れるつもりです）本を持ってゆきますつもり。『大自然科学史』の第一巻と『渡辺華山』と『写真百年史』の三冊を入れましょう。どうも本の速度がいまのところ見当がつかず、大体どれ位ずつ入れてよいか見当がつきませんが、でも切れるといけないから少し早目早目に差し入れておくことにします。本もあなたが注文していった本を本屋にたのんだり、兄さま、Uさんに頼んでずいぶん方々をさがしていますが、なかなかありません。また、新刊でおそらくそうなのも私ほとんどたのんでいます。『ゴッホ』っていうのも『焰と色』と別に出ましたのでたのみましたが、売り切れらしいです。本のないのにはとても困っています。

みなさんが心配してよく留守宅に御見舞いに来て下さいます。みんなが「修ちゃんのことだから、ただでは帰って来ない。きっと中で勉強して何かをつかんで帰って来るから、大丈夫安心して待っていていращゃい」といって慰めて下さいます。

私たちはとにかくみんな元気になっていますから安心して下さい。二人の子供も元気です。お父